

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19820027

研究課題名（和文） 風土記の基礎的研究

研究課題名（英文） a fundamental study of Fudoki

研究代表者

兼岡 理恵 (KANEOKA RIE)

東京経済大学・経済学部・専任講師

研究者番号：70453735

研究成果の概要：本研究のテーマの一つである風土記受容について『風土記受容史研究』（笠間書院 2008）を刊行、同書は奈良時代の風土記編纂から江戸末期までの風土記受容の史の変遷を明らかにしたもので、2009 年第 26 回上代文学会賞を受賞した。また 17 世紀中期の地下歌人・下河辺長流の著作を中心として、当時における風土記観を考察した。さらに 18 世紀初頭の風土記を巡る知的ネットワークとして、前田綱紀と京都の知識人の仲介者的役割を果たした菅真静の事蹟を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	650,000	195,000	845,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,650,000	195,000	1,845,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：風土記、受容、地誌

1. 研究開始当初の背景

風土記は、現在の文学研究において、古事記・日本書紀・万葉集研究の補助的資料という位置づけであり、それ自体が研究対象となることは少なかった。しかし 1985 年に雑誌『風土記研究』が発刊、1997 年に新編日本古典文学全集『風土記』が刊行されるなど、1990 年代後半以降現在まで、風土記に関する研究も徐々に増加してきた。その研究の方法は、文体研究・説話研究が大半を占める一方、文学研究の基礎作業である本文研究に関しては、風土記は現存写本に恵まれないために進んでいない。

この写本が残っていないという状況は、風土記に対する関心の薄さを物語っている。しかしこれは見方を変えれば、曲がりなりにも現在なお風土記が残っているということは、風土記に興味を抱いた人々の存在があつてこそとも言える。

このような風土記の現在の状況から、編纂以来現代まで風土記が伝わってきた背景を考察し、その受容の具体的背景を探ることで、新たな風土記写本を見出す手がかりはないかという問題意識のもと、本研究では風土記受容史の解明を大きな柱とした。

その中でも特に、従来言及されることの少

なかった近世初期～中期における風土記受容について、また風土記本文の確定を進めるために『釈日本紀』を中心とした卜部家の学問を考察することにした。

2. 研究の目的

本研究は、和銅6(713)年撰進詔により編纂された風土記について、主に以下の観点から編纂当時の風土記の姿、及び風土記受容の歴史を明らかにすることを目的としたものである。この研究によって、風土記研究の基盤を万全なものにし、今後の風土記研究を飛躍的に推進させることを目的とする。

(1) 風土記本文の復元
13世紀後半成立の『釈日本紀』を中心とした風土記逸文の本文研究により、風土記本文の確定をすすめる。

(2) 風土記をめぐる知の継承の解明
風土記の受容という観点から、歌学・神道・国学等のサークルにおける、風土記をめぐる知の継承を明らかにする。本研究では主に17世紀～18世紀を対象とする。

3. 研究の方法

(1) 資料調査

大阪府立中之島図書館における契沖・下河辺長流関係の写本調査

本居宣長記念館における本居宣長関係の資料調査

茨城県立歴史館における風土記関係の写本調査

国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムによる資料調査

(2) 実地踏査

大阪周辺における契沖・下河辺長流関連地(円珠庵など)の実地踏査

京都周辺における今井似閑関連地(金戒光明寺・上賀茂神社等)の実地踏査

三重県・津市周辺における谷川土清関連地(土清神社など)の実地踏査

奈良県・奈良国立博物館の見学

(3) 風土記、および近世歌学・歌学関係を中心とした文献研究

4. 研究成果

(1) 風土記受容史の総括

2008年2月に単行書『風土記受容史研究』(笠間書院)を出版した。本書は、奈良時代に風土記が編纂時されてから江戸末期まで、各時代に風土記がいかに受容されてきたのか、具体的な実例をもとにその様相を明らかにしたものである。巻末には「風土記受容史年表」を付け、風土記受容史を通史的に見通せるように構成されている。

受容という観点から風土記を捉えた研究は従来になく、本書によって各時代における風土記の文化性が明確になった。さらに今後

の風土記研究はもとより、日本における地誌観等の解明に大きく寄与するものとして学界において高い評価を受け、2009年第26回上代文学会賞を受賞した。

(2) 風土記編纂意図の考察

2007年11月に奈良国立博物館の見学、および奈良周辺で資料収集を実施、「『風土記』の世界 - 地方へのまなざし -」(『文学』第9巻第1号 2008・1)としてまとめた。本論文は、正倉院に保存される常陸国調布を契機に、風土記を中心とした上代文献に見られる布製作、また考古学の成果に基づき、当時の地方における布製作の現場、国司・郡司の役割等を踏まえた上で、風土記記事にあらわれる編纂者「国司」および「郡司」の眼差しを記事より具体的に読み解くとともに、風土記編纂の意図を探究したものである。

本論文のような複数学問領域の成果を踏まえつつ風土記を考察することは、今後の風土記研究に不可欠な方法であり、風土記研究の可能性を示すものである。

(3) 17世紀中～18世紀初期における風土記受容・知的ネットワークの解明 菅真静を通してみた18世紀初頭の知的ネットワークの解明

加賀前田藩の前田綱紀と、京都の公家や地下知識人等の知的ネットワークを仲介する役割を担った、菅真静という人物について調査、「知の仲介者 菅真静『自叙伝』を中心に」(『日本文学』第57巻第10号 2008・10)として発表した。真静は備中の武士の家に生まれ、青年期・熊沢蕃山に教えを受け、上京後は中院通茂に師事、その後通茂を通じて前田綱紀に『源氏物語』を講義し、源氏の注釈書まで著した人物だが、こうした人脈によって、上流知識人の間における書物や情報のやり取りを仲介する立場にもあった。本研究では京都・賀茂別雷神社三手文庫所蔵の契沖・今井似閑関連書に見える奥書から、真静の人脈を追うとともに、当時の知的ネットワークを明らかにし、真静さらには今井似閑のような、知の仲介者的役割を果たした人物の重要性を考察した。

下河辺長流の風土記受容

2009年5月上代文学会・古事記学会合同大会において、「17世紀中期における風土記受容 - 下河辺長流を中心に -」という発表を行った。

下河辺長流(寛永2～貞享3 1625～1686)は、17世紀半ば、初の地下歌人の歌

集『林葉累塵集』を編纂するなど、地下歌人の指導者として革新的役割を果たしたとともに、『万葉集』を中心とした古典研究を行った人物である。契沖をはじめとして、契沖の弟子であった今井似閑なども長流を師と仰いでいたことが知られる。

この長流を風土記の関わりという観点から見た時、長流にとって風土記とは、それ自体は研究対象となり得ず、あくまで『万葉集』研究における補助資料という位置づけであった。たとえば賀茂別雷神社三手文庫所蔵「萬葉古事并詞」は、『万葉集』中の語句に対して諸文献を用いて注釈を施したもので、寛文元（1661）年頃成立した『万葉集管見』の覚書的な写本であるが、そこで引用される風土記の多くは、仙覚『万葉集註釈』からのものである。

しかしその一方、延宝5（1677）年刊『続歌林良材集』では、「相模国風土記に云」とする「足軽山」に関する記述があるのをはじめ、寛文10（1670）年刊『枕詞燭明抄』等において「風土記」と称する文献を引用しており、その中には他書に見出せない記述もある。それらがいわゆる古風土記である可能性は低いものの、翻ってそこに長流の風土記に対する認識や地名への関心、そして近世前期歌壇における風土記観があらわれているとも言える。さらに言えば、長流の歌解釈・注釈書を刊行するということに対する姿勢も窺える。すなわち長流は、『万葉集』を従来の公家や武士などの上流知識人ではなく、いわゆる地下の人々に分かり易く説くために、これらの注釈書を執筆・刊行した。その際、風土記も、彼らが興味を持つような説話を中心に取り上げられているのである。

また17世紀中期は、名所図会などの出版も盛んになった時期であり、これらを注釈書に取り入れるということも行われている。

以上のように、長流を中心として、当時における風土記受容の在り方を考察したのが本発表の概要である。発表は今後、論文化・投稿する予定である。

（4）今後の展望

近世になって著されるようになった風土記の「注釈書」に注目し、注釈の具体相を考察する。例えば、豊後・岡藩の地誌『豊後国志』編纂に携わった唐橋世済という人物は、地誌編纂の過程で『豊後国風土記』の注釈も行わせている。その注釈は、地誌編纂時に行った豊後の実地踏査の成果も盛り込まれており、江戸時代の地誌編纂と風土記研究がまさにリンクした一例ともいえる。「注釈」という作業は、注釈者本人はもちろん、その時代における当該書に対する評価なども窺えるものであり、今後、様々な角度から検討す

べきものとする。なお本研究は鈴木健一編『近世の知』（森話社 2010年刊行予定）に発表予定である。

また風土記は、従来から万葉集・記紀研究の補助資料として、これらの注釈書に引用されることが多かった。このうち風土記逸書と認められる場合は「風土記逸文」と位置づけられて本文・説話研究などが進められてきたが、風土記以外の文献（単に「風土記」と称した、あるいは偽風土記）については、特に注目されなかった。しかしそれらの出典・内容を考察することで、その時代における風土記や地名に対する意識を明らかにすることが可能である。ゆえに、まずは近世の万葉集注釈書を中心に、風土記引用状況をデータベース化し、当時の「風土記」そして「風土記的なもの」の概要を把握する。なお、「地名」という観点からの研究は、2009年8月古代文学会において発表予定である。

さらに風土記受容研究の基本資料として、風土記関連の写本のデータベース化を進めている。これらの研究によって、風土記に留まらず当時における知のネットワークが具体的に解明されていくことは必至である。一方、『釈日本紀』写本調査など十分に進行出来なかった面もあり、この点についても今後とも研究を継続していく。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

兼岡理恵

「『常陸国風土記』再発見前夜 - 藩撰地誌『古今類聚常陸国誌』 - 」

（神田典城編『風土記の表現 記録から文学へ』笠間書院 2009年刊行予定）

兼岡理恵

「新治の国小筑波の岳」に込められた意味 - 『常陸国風土記』香澄里・新治洲条 - 」（同上）

兼岡理恵

「「縁」の地、円珠庵 契沖、水戸藩、万葉集」（『國文學』第54巻6号 2009・4 pp152 - 157）査読・無

兼岡理恵

「知の仲介者 菅真静『自叙録』を中心に」（『日本文学』第57巻第10号 2008・10 pp23 - 30）査読・無

兼岡理恵

「『風土記』の世界 地方へのまなざし」

(『文学』第9巻第1号 2008・1 pp98 - 107)
査読・無

[学会発表](計1件)

兼岡理恵

「17世紀中期における風土記受容 下河辺
長流を中心として - 」

(平成21年度上代文学会・古事記学会合同
大会 於：國學院大學 2009・5・24)

[図書](計1件)

兼岡理恵

『風土記受容史研究』

(笠間書院 2008 480頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

兼岡 理恵 (KANEOKA RIE)

東京経済大学・経済学部・専任講師

研究者番号：70453745

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし